鹿児島県立与論高等学校
校長通信
第16号（令和7年9月18日／校長 大倉秀心）

校訓「好学 創造 親和 不屈」
鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地１
電話（0997）97-2064
FAX（0997）97-2844

「大学入学共通テスト」出願開始

令和８年度大学入学共通テストの出願が始まっています。出願期間は９月16日（火）10時から10月３日（金）17時までです。本校でも先週９日（火）に出願に関する説明会を行い，基本的な注意事項を全員で確認しました。

共通テストの出願に関して今年度から大きな変更が行われています。それは，基本的に出願手続きは志願者がＷｅｂで行うことになったのです。従来は紙の志願票を学校から一括して郵送していたわけですが，個人個人がネット上で出願を完結させるようになったのです。

教諭時代，進路指導を担当してきた私としては，まずは生徒に志願票に下書きをさせた後に清書をさせ，記入内容に漏れや誤りがないか，受験料納付の領収書が確実に添付されているかなどを，担任，進路主任，教頭など複数の目で確認していた時代を懐かしく思い出します。Ｗｅｂ出願になることで，生徒の入力漏れなどはエラー表示などで事前に修正できると思われるので，このような教員側の作業が減ることは歓迎すべきことだと思います。しかしその分，志願者情報を入力する生徒自身の自己責任の割合が大きくなることを皆さんは自覚する必要があるでしょう。

「親が出願手続きを全部やっている家庭の子供は落ちる」

ネットニュースで興味深いタイトルに目が留まりました。

「大学受験で『親が出願手続きを全部やっている家庭の子供は落ちる』納得の理由」（東洋経済ONLINE 9月9日（火）11:00配信）

このような記事が出るということは，昨年度までのような紙の志願票による出願では，面倒な出願手続きを全て親がしていたという受験生も一定数いたのかも知れません。先ほど述べた通り，Ｗｅｂ出願ということになると，通常，生徒は自分のスマホやタブレットを使うことになるので，自分自身で出願登録することになると思われます。しかし，紙による出願であろうとＷｅｂによる出願であろうと，手続きを親に頼っているようでは受験はうまくいかないということに，私も１００％同意します。その理由が記事では次のように述べられています。

出願は「受験をはじめます」と宣言する行為。受験勉強に集中したいからといって手続きを親にやってもらったりしてはいけない。それは，大学受験が自分ごとにならないからだ。出願というのは，「この試験を受けさせてください」「この大学を受験させてください」ということを自分からお願いすること。それを人任せにしてしまうと，受験に対するスイッチが入らない。出願というのは，単なる事務手続きではなく，受験生が「自分の受験をはじめます」と宣言する行為でもある。ここで自分の名前や顔写真を入力し，検定料を払い，受験科目を選択する。その一つ一つの行動が「いよいよ本番が始まる」という自覚を芽生えさせてくれる。だからこそ，出願を親に任せきりにしてしまうと，その重要な「気持ちのスイッチ」が入らないままになってしまう。（記事の表現を一部省略，短縮しています）

もちろん，受験料の支払いなどについては親の協力は必要でしょう。しかし，子供には勉強だけをさせ，面倒な手続きを全て親がするような家庭は，「誰の受験なのか」「誰が成長するための経験なのか」という視点が完全に欠落しているのです。今後，進学するまでの間に，様々な手続きや作業が出てくると思いますが，金銭に関わる事柄で親と相談する以外のことは，生徒の皆さんが主体的に動くことが当然なのです。

15年ほど前，国公立大学二次試験の様子を大阪

に視察に行ったことがあります。私が宿泊したホテルには多くの受験生も宿泊していました。バイキング形式の朝食会場は一目で受験生と分かる高校生や浪人生で溢れていました。一人で来ている人，友人と来ている人，親子で来ている人。様々な組み合わせの人たちを人間観察しながら，「彼らは今どんな気持ちでいるのかな」などと想像しているときに，一組の親子に目が留まりました。男子高校生（浪人生かも知れません）と母親です。彼は目覚めがあまりよくないのか，いくぶんボーッとした表情でトレーを持ち，ただ立っています。その横でトングを持った母親が慌ただしく食べ物を選び，息子が持つトレーの皿に食べ物を運んでいる。私はこの様子を見て少なからず衝撃を受けました。これから大学生になろうという人が，自分で食べるものも選ばないのかと。母親からすれば，「あなたは試験だけに集中していればいいの。それ以外のことは全部私がやってあげるから」という気持ちだったのかも知れません。でもそんなことをしていれば，仮に彼が入試に合格したとしても，どんな大人になっていくのか懸念を拭い去ることはできないのです。

出願手続きの話から思い出したエピソードでした。

ペンだこの痛みは努力の証

ある予備校から毎月送られてくる便りの７月号に，「ペンだこの痛みは努力の証」という記事の見出しを見て懐かしさを覚えました。皆さんは「ペンだこ」がわかりますか。絶えず文字を書くことで，ペンや鉛筆などの筆記用具があたる中指の一部分が固くなってできる「たこ」のことです。私にもかつて「ペンだこ」はあったのですが，業務がパソコン中心になってからは，今ではすっかりきれいに無くなってしまい，「ペンだこ」を懐かしむ気持ちになったのです。

その予備校の校舎や寮には，その時々に応じて生徒たちに意識して欲しいことや行動して欲しいことを記した檄文がいくつも掲示されているようです。その中の一つに「中指の　ペンだこ痛む　１学期」というものがあり，そこにはさらに「とにかく書いて書いて書きまくれ　見ているだけじゃ駄目だ」とも記されているといいます。記事は次のように続きます。

一度，中指に触れてみましょう。１学期が終わる頃，中指のペンだこが痛むほど書き続けたあなたの努力は，その小さな痕に凝縮されています。それはノートに向かい続けた時間，問題集を解いた日々，間違いと向き合いながら成長してきた証であり，まさに努力の勲章です。

夏は受験生にとって勝負の季節です。自分自身と戦う時間でもあります。ペンだこがもっと固くなるほど書きまくって，知識を深め，思考を研ぎ澄ませていきましょう。その先にあるのは，秋からの納得のいく成果と大きく成長し自信を付けた自分自身の姿です。

この夏，さらにペンを走らせましょう。ペンだこを誇りに，目標に向かって突き進もう！

このように書かれていました。一度受験に失敗し，自分の弱点を把握している浪人生たちが，このような檄文に接しながら日々，受験勉強に励んでいることを想像してください。ICTの時代になり，勉強にもタブレットが幅を利かせるようになっても，学んだ内容を確実に自分のものにするには，やはり手を動かし，書くことによって，脳に刻み込んでいく作業が必要だということです。結局はアナログ作業が物を言うことを浪人生は肌で感じているのです。この部分が浪人生の強さであり，同時に受験においてまだ失敗を経験したことの無い現役生の甘さでもあると私は感じています。現役生の皆さんには，浪人生のこういう部分を見習って欲しいのです。

私が３年生の担任をしていた頃，本当によく勉強する女子生徒がいました。彼女は家庭での勉強の際には鉛筆ではなく，安い使い捨てボールペンを使っていました。インクが切れたら新しいものに切り替えます。ただし，使い終わったボールペンは捨てずにペン立てに立てておくのです。そうすると，勉強すればするほど使い済みのボールペンは増えていく。何十本，何百本と増えていくのです。そのボールペンを眺めるたびに，「私はよく努力している。これだけやっているのだから，私は大丈夫だ」と自分に自信が持てるようになったと言うのです。きっと彼女にもペンだこはできていたとは思いますが，彼女にとってはこの使い済みのボールペンの山も努力の証であり，自信の源だったのだと思います。できる人は，「ペンだこ」であれ，使い済みのボールペンであれ，自分のモチベーションを上げる工夫もしているのですね。

与論高校生のこれからの健闘を祈ります。